熊本でも東北3県でも

自然災害などで大きな被害を受けた学校をベルマーク財団は支援しています。その原資となるのがベルマーク預金を使った皆さんのお買い物です。お買い物額の1割相当額が商品を扱う協力会社から財団に寄付される仕組みだからです。東日本大震災の後、財団職員は被災地を視察し、どんな支援が必要かを尋ねています。今年は東北3県と昨年4月の熊本地震で被害が大きかった熊本県阿蘇地方を訪ねました。

福島県 二本松 復興へ 役割自覚浪江っ子

浪江中学校

今年4月に全町に出ていた避難指示が一部地域を除いて解除された福島県浪江町。9月8日、二本松市の避難先から浪江中学校（笠井淳一校長、生徒9人）の全校生徒が浪江町を訪ねると聞いて、同行させてもらいました。

「本来ならば、多くの生徒が学ぶはずだった校舎を、ぜひ見せたい」と笠井校長が計画しました。いまの校舎は福島市の中心街から車で約40分ほどの廃校になった小学校校舎です。6人がスクールバス、2人が公共バス、1人が親の送迎で通っています。

1人が欠席でしたが、引率の先生15人とスクールバスに乗り、午前8時半に学校を出て、15分の休憩を入れて1時間半で町に着きました。JR浪江駅や請戸港の工事現場を見て、大震災で亡くなった町の人たちの慰霊碑をお参りし、町役場では馬場有（たもつ）町長と面談しました。

「復興とは、浪江町がどうなることだと思いますか」

町長の歓迎の言葉の後、生徒から真っ先に出た質問です。馬場町長も、さすがに驚いた様子でした。

「昔のような町に戻ること。建物が元に戻るとか、いろいろあるけれど、町の人の気持ちが昔のように戻ったと思えること。ハートの問題が大事」と、「心」を強調しました。

全国から寄せられた激励や支援への感謝、町の好きなところについてやり取りが続きました。

「苦しかったことは」。そう問われた馬場町長は、「いっぱいあります」。予想もしなかった原発事故が起き、町の人をどこに避難させればいいのか、判断を迫られたことや、どこに、誰が避難したのか分からなかったこと、などです。

「一番つらかったのは……」。5秒ほどの沈黙の後、避難指示が出たために、助けられた生命を救うことが出来なかったことに涙を浮かべました。

面談後、3年の渡辺みさとさん（15）が「強く、前に向かって町長さんが頑張っているので、自分たちも頑張ろうと思うことが出来ました」とお礼を述べました。

原発事故前は約千人が通っていた浪江中学校は、6年半前に時間が止まったようでした。

卒業式があった体育館には割れたガラスが散乱し、教室の黒板には卒業を祝うメッセージ、廊下にも色とりどりの祝福カードが飾られていました。校舎内を見て歩き、ドローンを飛ばして空から学校周辺の様子を確認しました。

避難指示が解除されても、すぐに戻れるわけではありません。福島大学の研究チームが9月に発表した、浪江町を含む双葉郡住民の実態調査中間報告では、「無職」と回答した人が約6割という現実があります。自宅の建て替え、病院や商店と、暮らしの基盤が整うには、まだまだ時間がかかりそうです。町に戻ったのは8月末で360人と、住民の2％です。

町には来春、新たな小・中学校が開校しますが、「避難先再開校」の役割は終わりそうもありません。

「どこにいても、根っこが大切です。背景を共有する浪江の子が浪江の学校で学ぶ。そのことが大切です」と笠井校長は力を込めます。まだまだ物心両面の支援が必要とされています。

仮校舎の浪江中から浪江町役場を訪問した浪江中学生に歓迎のあいさつをする馬場有町長

浪江小学校・津島小学校

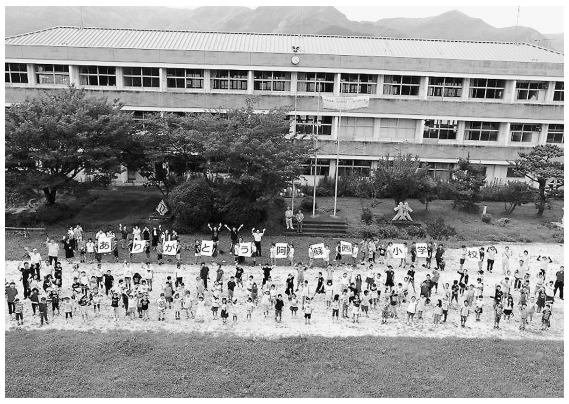
浪江小学校、津島小学校も二本松市内の別の廃校舎を使っています。同じ校舎を利用していますが、両校に校長、教頭がいます。2校合わせて児童が5人ですから、運動会には住民100人が参加し、盛り上がりました。町の代表的行事「十日市」は帰還した町で復活しますが、これまで二本松市で開かせてくれたことに感謝をこめて、市内でもプレ開催する準備が町商工会を中心に進んでいます。子どもたちは手作りのみこしを担ぐ計画です。学校の存在と5人の小学生が、避難生活を続ける大人に元気を与えています。

ふるさと愛を詠み込んだ「なみえっ子カルタ」を考え、郷土陶芸を学ぶ子どもたち。6年生でさえ震災時は幼稚園児でしたが、「浪江の子として、何が出来るかを意識しています」。

浪江小の遠藤和雄校長、津島小の郡司博明校長はそう感じています。

「人数が少ないから10時間分が1時間」。ミシンの操作も1対1で

熊本県 阿蘇地方 成果収める逆境下の生徒


解体直前の旧阿蘇西小校舎にお別れのドローン撮影＝㈱島村組撮影、阿蘇西小提供

熊本県小中学校長会の協力で、9月6日に阿蘇外輪山内の2校を訪ねました。ともに統合した直後、地震に見舞われました。

阿蘇西小学校

阿蘇市立阿蘇西小学校（井上利之校長、児童数132人）は阿蘇神社を中心に栄えた地域にありますが、人口が減って近年は小学校の統合が進んでいます。同じ旧阿蘇町の3校と統合する計画で、まず尾ヶ石東部小と昨年4月に先行統合しました。阿蘇西小の校舎で新学期が始まった6日後の14日に前震があり、16日のマグニチュード7・3の本震で甚大な被害を受けました。

地面に大きな亀裂が走り、壁はひびだらけ、あちこちが崩れ傾き、その後の余震でも被害が拡大しました。比較的被害のなかった旧尾ヶ石東部小の校舎に引っ越し、5月9日に授業を再開しました。合併で広くなった校区の各地から通う児童にスクールバスは欠かせませんが、道路は寸断されてズタズタです。どうバスを運航するか、話し合いが続きました。

校舎の解体工事が進む中、嬉しいニュースが届きました。金魚を飼っていた玄関の水槽が壊れたことに先生が気づいたのは揺れの何時間も後でしたが、5匹中2匹が生きていました。水が抜けなかったプールに放したのを、解体を前に今年6月に見に行ったところ、2匹とも元気に泳いでいたのです。しかも10～15センチだった体長が30センチとコイのように大きくなっていました。尾ヶ石東部中の玄関の水槽に移され、ゆったりと泳いでいます。井上校長は「復興のシンボル」として大事に育てたいと話しています。

南阿蘇中学校

南阿蘇村立南阿蘇中学校（坂梨正文校長、生徒数265人）は、長陽中、久木野中、白水中の3校が一緒になって開いた開校式の8日後、本震に見舞われました。土砂崩れで道路は寸断され、近くの阿蘇大橋は崩落、犠牲者も出ました。旧長陽中を改修した真新しい校舎も大きな被害を受けました。記念碑は倒れ、体育館の天井の一部は落ち、図書室や家庭科室は棚が倒れ、物が飛び散りました。グラウンドはヘリコプターの発着場になり、体育館は1200人の避難者であふれました。

生徒の安否は、統合直後のために緊急連絡網もできておらず、旧3校の先生がチームを組んで、足で回って生徒一人ひとりの無事を確かめました。

南阿蘇中では、大型プリンターがさまざまな用途に使われていました

校区が広くなり、生徒の8割がバス通学で、5台の大型スクールバスが活躍しています。震災後は大型バスをマイクロバスに切り替え、安全なルートを繋ぎ合わせて子どもたちを運びました。くまもと青陵高校の配慮で、被害が軽微だった学校施設を臨時寄宿舎として借りて、12人の生徒がしばらく共同で暮らしました。

そんな環境でも、子どもたちは元気です。グラウンドが長らく自衛隊の拠点となって使えなくても、中体連では大きな成果を収めました。統合で生徒が増えたため、校内合唱コンクールもできるようになりました。

防災教育にも力を入れています。抜き打ちのミニ訓練をしたり、生徒一人ひとりが防災頭巾を常備したり。リアルHUG（避難所運営ゲーム）にも取り組んでいます。1～3年生が縦割りで疑似家族を作り、与えられた条件を踏まえた上で避難所運営のプランを考え、実際にやってみます。震災の時に生徒たちが目にした家族の様子なども参考にした工夫も加えています。

ベルマーク財団の支援を利用して購入した大型プリンターは中体連出場を励ましたり、お客さんを迎えたりする時の横幕制作などに活躍しています。大幅に迂回しなければならなかった南阿蘇地区ですが、崩落した阿蘇大橋の隣の長陽大橋を通るルートが8月27日に開通しました。様々な問題は抱えながらも、復興の実感は子どもたちの心にも着実に刻まれています。

会社創立記念にマーク集め

特別支援4校に 4万5千点寄贈

品川グループ

創業100周年事業の一つとして、昨年9月からベルマークを収集している品川グループ（品川祐一郎社長、本社・富山市）が、1年間で集めたベルマーク4万5535点を県内の特別支援学校4校に寄贈しました。児童・生徒数が少なく、マークが集まりにくい特別支援学校に贈るため、従業員やディーラーの店頭を訪れた顧客に回収を呼びかけ、3カ月ごとに社内で仕分け、集計してきました。

9月22日、富山総合支援学校、富山大学付属特別支援学校、富山聴覚総合支援学校、富山視覚総合支援学校の4校でそれぞれ寄贈式があり、品川社長らが訪れてマークを手渡しました。

富山聴覚総合支援学校の大嶋淳子校長は「本当に感謝いたします。1枚1枚の重みを感じます」と話し、同社に感謝状を手渡しました。PTAが集めたマークと合わせて、拡大投影機や書画カメラ等の購入にあてるそうです。

品川社長は「地域の子供たちの未来のために、少しでも力になれればとグループ全体で取り組んできました。今回の取り組みが良いきっかけとなりましたので、今後も継続していきたい」といい、記念事業後も収集を続ける予定です。

13人の大使中心 3千人社員活動

キューアンドエー

ICT（情報通信技術）サービス事業のキューアンドエー（川田哲男社長、本社・東京都渋谷区）が、創立20周年を記念して、2月からグループ会社を含む全社員3千人でベルマークの収集を始めました。各事業拠点とグループ会社の従業員から任命した13人の「ベルマーク大使」を中心に進めています。

同社はICTサービスを中心にコールセンター運営、人材派遣事業を展開しており、CSR活動として被災地の学校でのマナー研修やNPO法人ITジュニア育成交流協会との協賛、宮城県警のサイバーパトロールへの協力にも力を入れています。

CSR担当で、ベルマーク収集を推進する来栖香さんは、「全社員が継続できて、時間があるときに協力可能なのが魅力」と言います。ボランティア経験や社会人大学院で学んだことを通じて、「社会問題の解決には個人のボランティアでは限界があり、企業がビジネスの力を使って継続することに可能性を感じた」と話します。

戦略室・広報担当の大野香穂里さんは「休憩室や自動販売機のそば、部署ごとに回収箱を置いて、気軽にマークを入れられる環境作りをしています」と言います。

1年の活動内容 発表しませんか

来年の運動説明会

ベルマーク財団が開く「運動説明会」で体験を発表してくださるPTA、団体を募集しています。皆さんの一年間の取り組みと成果、教訓をぜひ共有してください。

説明会は毎年5～6月にかけて、ベルマーク財団が全国100カ所近い会場で開いています。参加するのはほとんどが年度が替わって新たにPTA役員となり、運動に取り組む皆さんです。

発表を終えた方からは、「めったにない貴重な機会、いい記念になった」「発表をまとめているうちに、改善の余地がまだまだあることに気づいた」といった感想をいただいています。

集め方や整理の仕方は学校の規模や地域事情によって異なるようですが、「ひじょうに参考になった」と多くの感謝の声を毎年、多数いただいています。

発表は10分程度、形式や内容は自由です。仕分けに使った容器や呼びかけに使ったポスターを持参したり、写真をいっぱい使ったスライドを上映されたりする方もいます。寸劇を盛り込んだPTAもありました。今年の発表内容は財団ホームページ（http://www.belmark.or.jp/）でご覧いただけます。

発表者には、所定のお車代を差し上げます。お申し込み・問い合わせは、ベルマーク教育助成財団広報部（電話03－5148－7253）へ。

ベル預金で学校設備を買いましょう

5万円前後
ディスゲーター
とびなわ練習台
デジタルカメラ
展示板
横断幕
もちつき機
書画カメラ
パイプ椅子収納台車
教材提示装置
応援旗
空気清浄機
BDレコーダー
キンボール

4万円前後
マーチングドラム
高圧洗浄機
石油ファンヒーター
身長計
ファクシミリ
平均台
ホームベンチ
SD・CDシステムコンポ
ワイヤレスマイク
踏み切り板
キーボード
炊飯器
液晶テレビ
プリンター
横断幕
空気清浄機
全自動洗濯機
強力パンチ
顕微鏡
電子レンジ
ジャンボボール
竹馬整理台

3万円前後
一輪車収納スタンド
赤白玉入台
芝刈機
複製画
大玉
SD・CDシステムコンポ
ゲームカウンター
工場扇
車いす
ミシン
ベンチ
体操マット
デジタルカメラ
ボール入れかご
傘立て
綱引ロープ巻取器
店舗用クリーナー
竹馬整理台
アクアリウム
デジタルカメラ
オーブンレンジ
加湿器

40～100万円前後
トランポリン
アップライトピアノ
グランドピアノ
マリンバ
拡大機
講演台
校旗
AED
コピー機
プラズマテレビ
アウトドアクロック
エレクトーン
高速印刷機

30万円前後
コンサートシロフォン
シュレッダー
アルトサクソフォン
電動裁断機
電子ピアノ
紙折機
和太鼓
赤外線暖房機
大判プリンタ
アウトドアクロック
プログラムタイマー付時計
液晶プロジェクター
百葉箱
クラリネット
書架

20万円前後
ハイビジョンテレビ
ジェットヒーター
舞台用照明器具
屋外用壁掛時計
学校用オルガン
サッカーゴール
ドラムセット
肋木クライミングウオール
屋外掲示板
書画カメラ
和太鼓
朝礼台
冷蔵庫
パソコン
優勝旗
展示ケース
エレクトーン
学校用シンセサイザー
スクールキャビネット
飼育小屋
カラーレーザープリンター

11～15万円前後
立奏木琴
ウオータークーラー
マルチひな段
学校用オルガン
ポップコーン機
移動式救助工具セット
学校用キーボード
集会用テント
赤外線ヒーター
卓球台
パソコン
自動紙折機
ワイヤレスアンプ
液晶テレビ
車いす
展示板
冷蔵庫
裁断機
スクリーン
プロジェクター
デジタルビデオカメラ
フットライト
電動アイススライサー